テネシー州キングストンに於ける方言について

川 口 博 久

テネシー州東部の Kingston は Knoxville から約 60 km 西方にある人口5000人程の山あいに開かれた町である。テネシー川支流沿いの狭小な土地に申し訳ほどの中心街があり，一般住居はほとんどが坂道を上った所に点在している。いかにも山間部に開かれたアメリカの典型的な町といったのどかなたたずまいを呈していた。

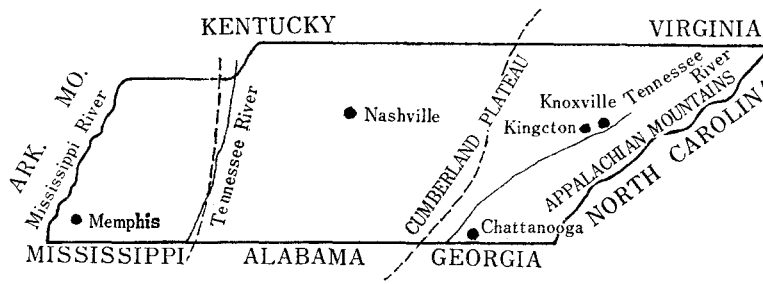
この地域は，合衆国の方言区分によると North Carolina 州西方地域と共に中部南方地域 (South Midland) を形成する。この地域の言語特徴について Hans Kurath, Raven I McDavid は著書 *The Pronunciation of English in the Atlantic States*[1] で次のように述べている。

> The South Midland area, comprising the farflung Appalachians and the Blue Ridge from the Pennsylvania line to northern Georgia (a stretch of some 500 miles), is a linguistically graded area without any one dominant population center. Nevertheless, it has a unique configuration of dialect features that sets it off from the North Midland (Pennsylvania) and from the South.

本稿では Kingston において，Kurath, McDavid 両学者が述べる特徴がどのように見出されるか，音声面から考察していきたく思う次第である。

I テネシー州の地形

テネシー州は東部,中部,西部と3地域に区分される。それぞれの地域は互いに非常に異った地形を呈し，それがそれぞれの生活様式を特徴付けている。東部は標高約 2000 m のアパラチア山脈を代表とする山々が重なりあった山岳地域と言ってよかろう。中部は主としてカンバーランド川流域をさし，東部の山々が次第に高原に変化し広大な大地におおわれたこの州一番の肥沃な地域である。西部は Knoxville で源を発し一度アラバマ州へ出，再度テネシー州に入り，そこを南から北に流れるテネシー川以西から，ミシシッピー東岸までをさし狭長な低地をなしている。



II テネシー州東部の開拓史

チェロキーインディアン (Cherokee Indians) の部落名 Tansai から Tennessee の名前が誕生したとされている。それからも推測できるようこの地の先住民はチェロキー族，チカソー族 (Chichasaw) 等のインディアンであり，テネシーは彼らインディアン達の狩猟場であったと考えられる。

1541年，Hernando de Soto に率いられたスペイン人一行が現在の Memphis のあたりに達した。1673年には，Louis Jolliet 等に率いられたフランス隊がミシシッピー川を下りテネシー西部に到達している。

一方東部地方では，1673年にバージニア (Virginia) からスモーキー山

脈 (the Great Smokies) を越え，James Needham, Gabriel Arthur に率いられたイギリス探検隊の一行がテネシーに入った。彼らは交易所を設置するという目的を持っていたが，Cherokee インディアンに殺され失敗に終っている。その後狩猟，交易を目的にテネシーに向け Carolina, Virginia から英国人が入植したが，それが本格的になるのは1760年代に入ってからであった。

1760年代には，東部テネシーの山岳地方に英国人の入植が始まった。1769年，テネシー州最初の住民として英人 William Bean がケンタッキー州に近いテネシー北東部に住みついた。1770年代に入るとカロライナからの開拓者による村ができるまでになっていった。

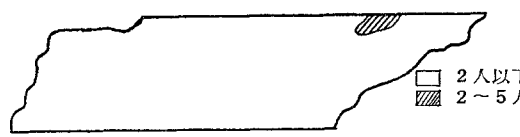
1790年頃から道路らしきもの（インディアンの使用した小道や，野牛の通り道を利用したものであった）が Knoxville 周辺のテネシー東部と Nashville を結ぶものとして切り開かれた。1800年初期になると幌馬車用道路もつくられていった。Nashville と Knoxville を結ぶ Nashville Road, Knoxville と Virginia 州を結ぶ Great Valley Road, Nashville, Chattanooga, Georgia 州を結ぶ Unicoy Road, Nashville と Mississippi 州を結ぶ Military Road がその主たるものである。当時の New England, Pennsylvania, 南部から Ohio に至る道路発達網と比べるとまだまだごく初期のものであった。

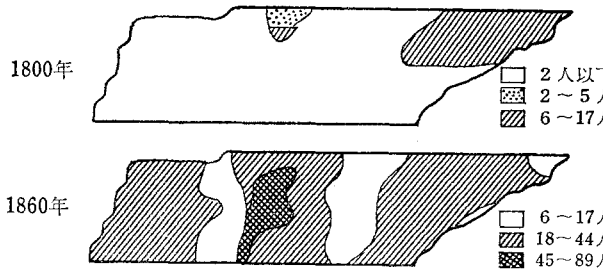
しかし1854年には Tennessee 州最初の鉄道が Knoxville と Chattanooga 間に開通しテネシー州東部の本格的開拓へとつながっていくのであった。

ちなみにテネシー州の人口推移を見てみよう。

（1平方マイルあたりの人口密度）[2)]

1790年





1790年には Knoxville, Kingston 付近はまだまだまとまった人口を持つに至らず，わずかに Kentucky に近いテネシー北東部にそれらしき徴候が見える。1800年になり Knoxville を中心とした道路整備と共に，Knoxville 周辺地域は急激に人口が増え，鉄道開通後の1860年の調査では，その傾向がさらに激しくなった様子をうかがい知ることができる。

以上のような人口増加とともに，1796年テネシー州は合衆国16番目の州として認められた。そして1799年には Kingston の町も誕生するのである。

Ⅲ 調査方法

1979年8月 Tennessee 州 Kingston にて20人の被調査者に対し面接をし，出生地をはじめとし，被調査者自身のこと，Kingston の町のこと，Roane county のことなどを話してもらいカセットテープに録音する方法を用いた。

本来ならば被調査者すべての音声分析を行い，そこから Kingston での音声特徴を導き出すのが筋であろう。しかしながら録音の不明瞭な点があったり，被調査の経歴が不明の点があったり，種々の問題にぶつかった。そのため本稿では，録音の明瞭さ，被調査者及びその両親の出身地等を考慮し最適と思われる婦人一名を選び，その音声分析をした。分析対象となった被調査者が最少人数の一名という点で不安を覚えないわけではないが，被調査者の経歴から，おおよその特徴がつかめるものと考え，あえて試み

ることにした。

なお被調査者は52歳，両親共に Kingston で生まれ育ち，現在町の婦人部にて活躍している。

IV 音声分析

(1) 上昇二重母音 (Rising Dipthongs) [aɪ][3)]

Kurath と McDavid によると，West Virginia 南部，Virginia, North Carolina 山岳地方，South Carolina 山岳地方では [aɪ] が現われる音環境により，異った音になるという[4)]。

すなわち [aɪ] が有声子音 (voiced consonants) の前あるいは語末にくると，それは単純母音 (pure vowels) [ɑ] あるいは低・前母音 (Low, Front Vowels) [a] から中・中央奥母音 (Mid, Central Vowels) にゆっくりわたる音 (glide) [a·ɛ～a·ə] [a·ɨ] に変化する (Slow Dipthongs)。一方無声子音 (voicelss consonants) の直前では二重母音の第一要素が中央母音化し，[əɪ] [ɐɪ] となり有声母音直前の [aɪ] ほどゆっくりとは発音されないのである。

ex. five [faɪv] → [fa·əv] [fɑv]
wise [waɪz] → [wa·əz] [wɑz]
good-bye [gʊdbaɪ] → [gʊdba·ə] [gʊdba]
twice [twaɪs] → [twəɪs]

ところが以上のような使い分けが Kingston では見られず，すべて [aɪ] は単純母音 [ɑ] に変化していた。

ex. five [faɪv] → [fav]
child [tʃaɪld] → [tʃald]
life [laɪf] → [laf]
time [taɪm] → [tam] etc.

この単純母音 [ɑ] の原型は英国の Middlesex から Lincoln にかけ見出

され，そこでは slow dipthong [a·ɛ] の様な音が使用されていたようで，これが [a] に変ったとされている。

(2) 上昇二重母音 [aʊ]

South Carolina, North Carolina 海岸地方，Georgia を除く南部やアパラチア山脈地方では，[a] より舌の位置が高い [æ] を使用した slow dipthong [æ·ʊ] [æʊ] が用いられている。

ex. house [haʊs] → [hæ·ʊs]

mountain [maʊntɪn] → [mæ·ʊntɪn]

Kingston では [aʊ] はすべて [æʊ] に変化するという結果が出た。ただ now, throughout などの単語では [æ·ʊ]，あるいは [æ] が長母音化したような発音が聞かれた。南部では slow dipthong [æ·ʊ] あるいは [æ] が長母音化した音も存在しているということだ。[5)]

ex. county [kaʊntɪ] → [kæʊntɪ]

ground [graʊnd] → [græʊnd]

down [daʊn] → [dæʊn]

[æʊ] の音は England 東部の地方音の中にも見出されるようである。

さらにこの [æ] に関しもう一つの特徴を付け加えておきたい。それはこの [æʊ] を使用するさい，被調査者はすべて鼻音化し [æ̃ũ] のごとく発音していたということである。(この鼻音化については後述を参照していただきたい。)

(3) 母音後 [r] (Postvocalic [r])

New England, Virginia 中部から海岸寄り，North Carolina の海岸，South Carolina 中部から海岸寄りでは [r] 音が聞かれない。

ex. form [fɔm] fear [fɪə] farm [fɑm] further [fɜðə]

これは英国本国の影響の結果だと考えられている。現在のイギリス容認発音 (Received Pronunciation) では [r] 音が発音されていないが，17 C

初期アメリカへの移民が開始されたころは [r] 音は発音されていた。

ex. form [fɔrm]　fear [fɪɚ]　farm [farm]　further [fɝðɚ]

この [r] 音を出す発音が最初アメリカへ渡り，現在の一般アメリカ英語 (General American) の標準となったのである。その後イギリスに起った [r] 音を発音しない方法も当然のことのように新大陸アメリカに渡り一部海岸地域を中心に広まったが内陸部まで浸透する力は無かったと推定されているのである。

Kingston での被調査者の [r] 音の分析であるが，録音の不明瞭なところ，弱くしかも速く発音されるところでは困難をきわめた。しかし比較的わかりよい他の語の発音から判断して，この地域では [r] 音の使用があると断定してよかろう。

ex. part [pɑrt]　dark [dɑrk]　force [fɔrs]　fort [fɔrt]
important [impɔrtənt]　paper [peɪpɚ]　refer [rɪfɚ]
early [ɝlɪ]　birth [bɝθ] etc.

参考までに他の被調査者の発音も調べてみたが，大半の被調査者は [r] を使用していることが判明した。ミシガン州 (Michigan)，バージニア州 (Virginia) から移り住んだ婦人の発音に [r] 音が聞かれなかっただけである。

(4) 連結的 [r] (Linking [r])

[r] 音で終る単語の直後に母音ではじまる単語が来る場合両語間に [r] 音が入る現象をいう。

ex. There‿is [ðɝ‿rɪz]　far‿away [fɑr‿əweɪ]

この Linking [r] は英国南部，ニューイングランド地方，ニューヨーク市等では使用されるが南部ではまれだとされている。私の調査でもこの [r] が使用されている例は見出せなかった。

ex. the honor of [ɑ́nɚ ɒv]　the number of [nʌ́mbɚ ɒv]
for instance [fɚ ínstəns] etc.

(5) 母音の鼻音化 (Nasalized Vowels)

母音の鼻音化は英語のあらゆる方言に見られる現象である。コックニー (Cockney) にはコックニーの，ニューイングランドにはニューイングランドの，General American には General American のそれぞれ特有の鼻音が存在するとされている。又同地域に居住する住民間でも母音の鼻音化方法には差があるということだ。[6] (Low, Front Vowels)

Kingston では低・前母音 (Low, Front Vowels) [æ] はどの位置にあっても鼻音化され，音環境に影響を受けるようなことはなかった。一方 [æ] を含む二重母音 [æʊ] (General American では [aʊ] と発音される。上昇二重母音 [aʊ] の項を参照されたい。) は，その前後に鼻音 [m], [n], [ŋ] が来るとき鼻音化されるのが目立った。

ex. past [pæ̃·st] lives [læ̃·vz] facts [fæ̃·kts] dad [dæ̃·d]
county [kjæ̃ʊntɪ] down [dæ̃ʊn] mountain [mæ̃ʊntɪn] etc.

又鼻音 [m], [n], [ŋ] に先行する母音にも鼻音化現象が見られた。これは軟口蓋 (soft palate) の先端の懸壅垂 (けんようすい uvula) が次に来る鼻音の準備のため，鼻腔 (nasal cavity) への通路をはやく開きすぎ呼気がもれるために起る現象である。

ex. him [hĩm] event [ɪvẽnt] being [bĩŋ] inn [ĩn] etc.

その他にも [aɪ] が [ɑ] に変化した語にも鼻音化現象がひんぱんにみられた。

ex. five [faɪv] → [fɑ̃v]
ride [raɪd] → [rɑ̃d]
transcribe [trǽnskráɪb] → [trǽnskrɑ̃b]
title [taɪtl] → [tɑ̃tl]
ninety-nine [náɪntɪ naɪn] → [nɑ̃ntí nɑ̃n]
Carolina [kæ̀rəláɪnə] → [kæ̃rəlɑ̃nə] etc.

鼻音化される [æ] の音，[ɑ] の音はいずれも General American の [æ],

[ɑ] よりも，発音される際舌の位置が高いように感じられた。このため舌の位置が軟口裂に接近し一部呼気が鼻の方へ抜け鼻音化するのではなかろうかと考える。

（6） 南部の引きのばし発音 (Southern Drawl)

南部方言といえばこの「引きのばし発音」を第一の特色にあげる学者がいるほど，この音は南部音声を特徴づけている。

これは強勢のある母音 (stressed vowels) に起る現象であるが，特に強勢のある緩み母音 (lax vowels)[7] によくみられる。しかもこの母音が文末，あるいは意味の切れめ，すなわちポーズが置かれる所に来る場合に起る確率が高いようだ。文末及びポーズのある個所に来る単語は，比較的明確にしかも強く読まれるということからこのことは推察できよう。

ex. subject [sʌ́bdʒɪkt] → [sʌ́:bdʒɪkt]

book [bʊk] → [buk]

volume [bɔ́ljum] → [váljʊəm]

past [pæst] → [pæjəst] [pæ:st]

inn [ɪn] → [in]

Nashville [nǽʃvɪl] → [nǽjəʃvɪl] [nǽ:ʃvɪl] etc.

これまでは長母音化する drawl をあげたが，drawl の中には二重母音化するものもある。[8]

ex. less [les] → [leɪjəs]

今回の調査では二重母音化するものは見出せなかった。

この Southern Drawl の原因をアメリカ南部地方の温暖な気候に求める学者もいるが，一方では気候は発音に影響しないと考える学者も多くその真偽のほどは定かでない。[9]

（7） 短い "O" (Short "O") [ɒ][10]

Received Pronunciation では中・奥母音 (Mid, Back Vowels) [ɔ] が，

General American では低・奥母音 (Low, Back Vowels) [ɒ] に変化する。Kingston 地域でも [ɒ] が使われていた。

ex. god [gɒd] popular [pɒ́pjulɚ] etc.

これは Early Modern English に存在する [ɒ] 音が移民者と共にアメリカに渡って来た結果であろう。

（8） 子音 [ju] と [u]

米国東部の北部・中部地域では歯茎閉鎖音 (Alveolar Stops) [t] [d] あるいは有声歯茎鼻音 (Voiced Alveolar Nasal Consonants) [n] の後に Received Pronunciation の [ju] がくると [u] に変化する。私の調査では次の例のように [j] が発音されていた。

ex. news [njuz] volume [vɒljum] etc.

（9） 子音 [hw] と [w]

綴字 "wh" の音として General American では無声声門摩擦子音 (Voiceless Glottal Fricative Consonants) [h] で始まる [hw] がよく使用される。ニューヨーク市，ペンシルバニア州，サウスカロライナ州沿岸寄りでは，Received Pronunciation と同様に [h] を出さない有声両唇軟口蓋半母音 (Voiced Labio-velar Semi-vowel) [w] が使われる。Kingston 地域では General American と同じ [hw] が見出された。

ex. where [hwɛɚ] what [hwɒt]

V 結 び

本稿の最初にも述べたが分析対象者がたった一人であったということから Kingston 地域の方言特徴について断定をすることに少々危険を感じないではない。しかしあえてその特徴を述べるならば，南部方言の特徴が完全にこの地域のそれとは合致しないが，この地域の住民は南部方言の色彩

がかなり濃い音を使用していると言っても過言でないと考える。その中でも，母音の鼻音化，南部の引きのばし音，[aɪ] から [ɑ] への変化，[aʊ] から [æʊ] への変化などはその代表的特徴と言えよう。

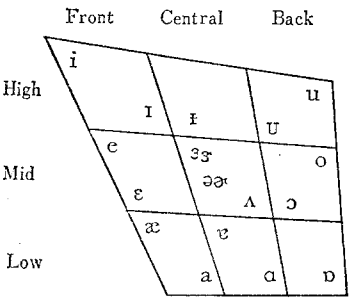
資料不足のため，南部の引きのばし音の原因を明確に把握できなかった不満さは残るが，機会をあらためて考察してみたく考えている次第である。

注

1) Hans Kurath & Raven I. McDavid, *The Pronunciation of English in the Atlantic States* (Ann Arbor; University of Michigan Press, 1961), p. 16.

2) Clifford L. Lord & Elizabeth H. Lord, *Historical Atlas of the United States* (New York; Henry Holt and Company, 1953), p. 64–70.

3) 本稿で使用する母音記号と舌の位置図を示しておきたい。



4) Kurath, *op. cit.*, p. 109.

5) Kurath, *op. cit.* p. 110.

6) Claude M. Wise, *Applied Phonetics* (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, INC., 1956), p. 199.

7) 英語の母音を発音する際，舌筋の緊張度があるのを張り母音 (tense vowels) と呼ぶが lax vowels はそれに対する母音である。英語ではアクセントのある長母音は tense vowels の部類に属する。

8) Trager, Smith 等の学者は長母音を認めていないため，そこから出発すれば drawl はすべて二重母音化するとも考えられる。

9) George P. Krapp, *The English Language in America Vol. I* (Tokyo; Senjo Publishing Co., Ltd., 1961) p. 64.

10) Jones 式の発音記号では [ɔ] となる母音である。

参考文献

Chase, Harold W., *Dictionary of American History*. N. Y.: Charles Scribner's Sons, 1976.

Dykeman, Wilma, *Tennessee*. New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1975.

Kenyon, John Samuel, *American Pronunciation*. Ann Arbor: George Wahr Publishing Co., 1969.

Krapp, George P., *The English Language in America Vol. I*. Tokyo: Senjo Publishing Co., Ltd., 1961.

Kurath, Hans & McDavid, Raven I, *The Pronunciation of English in the Atlantic States*. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1961.

Lord, Clifford L. & Lord, Elizabeth H., *Historical Atlas of the United States*. New York: Henry Holt and Company, 1953.

McCarthy, Joseph F. X., *Record of America Vol. 7*, New York: Charles Scribner's Sons, 1974.

Paullin Charles O., *Atlas of the Historical Georgraphy of the United States*. Washington; Carnegie Institute of Washington, 1932.

Wise, Claude Merton, *Applied Phonetics*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall, Inc., 1957.

The New Book of Knowledge Vol. 18, New York: Grolier Incorporated, 1967.